

S F D 児 の 予 後 調 査

— 地域への働きかけに向けて —

中2階病棟 発表者 吉村和子

池野位子・和田宣子・山口文子・森 艶美
中嶋まさ子・赤羽貞子・岡本美志・宮沢京子⁰²
小野千代子・窪田早百合・杉浦恵子・宮崎佐紀子
³⁶宮沢京子・岩崎浜子

I はじめに

S F D児とは、在胎週数に比して出生時体重の小さな児をいう。

当科における頻度は全出生数の約6%で、低出生体重児の約50%を占める。またS F D児は周産期死亡率が高く、生後の発育にも多くの問題があると言われている。当科でも昨年行なった調査で3例の障害児を把握することができたが、その3例ともS F D児であった。

そこで今回、S F D児と対照の正常出生児について、育児上の問題点を含め発育・健康状態について予後調査を試みた。またこの調査に関連して地域保健婦と話し合う機会を得たので、その結果を合わせて報告する。

II 調査対象

昭和54年1月～12月に出生したS F D児40例と正常出生児40例（S F D児をA群、正常出生児をB群とする。）

III 調査方法

郵送によるアンケート調査

未回収分は松本保健所より情報収集

IV 調査結果および考察

回収率：48%（38名）

A群：45%（18名）

B群：50%（20名）

未回収分：松本保健所より7名（A群）

1. 発育状態

発育状態を母子健康手帳の乳児・幼児発育値のパーセントイル値にあてはめると、ほとんどが10パーセントイル以上であり、A群がB群に比べて特に劣っているというようなことはなかった。またカウプ指数で表わしてみると、B群で1名20.9と肥満傾向がみられた他は15～19とほぼ正常範囲と思われ、A群とB群の差は認められなかった。

2. 育児上の心配事

心配事があると答えた人が38名中28名（74%）おり、多くの人になんらかの不安を持って育児にあたっていると言える。また初産婦19名中16名、経産婦19名中12名が心配事があると答えていることから、初産婦だけでなく経産婦であってもその悩みは変わらないようである。私達は入院中の指導にあたってとかく“経産婦であるから”といった考え方をしがちであるが、児の個別性、母親の

認識程度またはその時の育児環境等によって生じてくる問題も異なることを忘れてはならないであろう。

また心配事の内容をみると、離乳食、発育、健康の順に多かったが、A群とB群では内容が異なってきた。A群は発育、健康、離乳の順であり、B群では離乳、健康、母乳または人工乳の順である。A群についてはやはり小さく生まれたということで、発育状態について必要以上に心配をしているのではないかと推測される。

3. 相談相手

児のことで困ったことがあった時の相談相手としては、実の両親、近所の人、保健婦・助産婦の順に多かった。(この保健婦・助産婦というのは他に病院という項目があるため、地域の保健婦または助産婦と思われる。)しかし相談回数が一番多い人だけをとってみると、実の両親、きょうだい、近所の人および義理の両親の順となり、保健婦・助産婦または病院に相談する人はほとんどない。これは当然とも思われるが、異常が見過ごされる可能性も考えられるとともに、核家族が約1/2を示めていることを考えても、心配事が未解決のまま経過していることが多いのではないだろうか。地域保健婦からも最近育児ノイローゼの母親が多くなってきているという意見が出ており、気軽に相談できる専門機関の必要性を感じる。当科においても電話による育児相談を受けているが、勤務の関係上十分な相談相手となれないことも多い。しかしできるだけ要望に応えるよう努力するとともに、特に退院時要観察の児に対しては電話相談の活用をよりいっそう呼びかけていきたいと思う。

4. 罹患の有無

今まで病院でみてもらうような病気にかかったことがあるかという問に対しては38名中29名(76%)があると答えている。その疾患としては、かぜと特発性発疹などの皮膚疾患がほとんどであり、脳障害等重症な疾患はみられなかった。またA群で“ある。”と答えた人は18名中12名、B群では20名中17名で両者の罹患状況、疾患の相違は認められなかった。

5. 家庭訪問

38名中14名(37%)が保健婦または助産婦の家庭訪問を受けており、A群では18名中9名、B群では20名中5名である。新生児訪問については各市町村で異なっており、松本市では未熟児(出生児体重2500g以下)に対しては全例訪問を行なっているが、全出生児に対する訪問は難しく要請があった場合等に限られている。このため現状ではSFD児のうち50%は家庭訪問を受けずに済んでしまうことになる。

家庭訪問を希望しているかどうかについてはアンケートを取らなかったが、育児上の心配事があると答えた人が多かったことを考えてもその需要は大きいのではないと思われる。

6. 健康診査

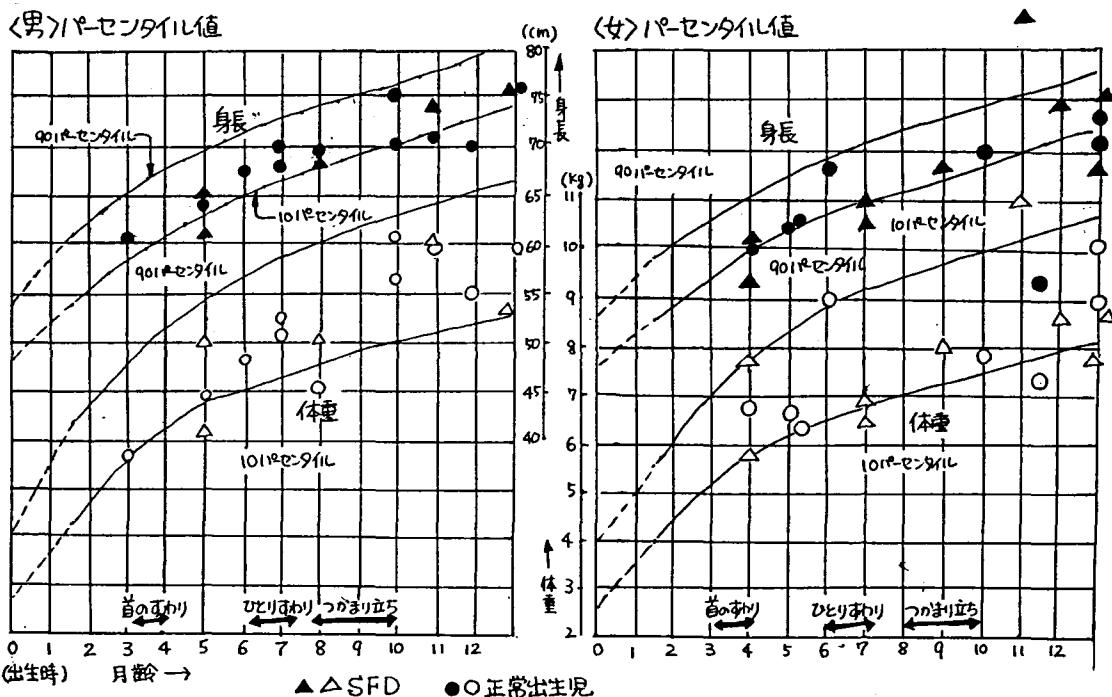
ほとんどの人が各月数別の健診を受けており、何らかの問題を指摘された人は38名中10名で、A群は18名中3名、B群は20名中7名であった。このうちA群では要観察・要治療の児は1例もなく、B群ではLCCの疑いで要観察の児1名、皮膚疾患の要治療児1名であった。

7. アンケート未回収分の児について

松本市の未熟児カルテより7名の児について把握することができたが、このうち問題が指摘されている児は2名あった。1名はソケイヘルニアで1か月に1度小児外科受診中、もう1名は下肢が短い、無表情、不活発などが健診で指摘され、現在CPと甲状腺機能低下症ということで信大小児科受診中である。

アンケート結果

1. 発育状態



2. 育児上の心配事

母親初産経産別

対象	初経	初産	経産	計
A		12	6	18
B		7	13	20
計		19	19	38

心配事の有無

	A		B		計	
a ない	4	P 2	6	P 1	10	P 3
		M 2		M 5		M 7
b ある	14	P 10	14	P 6	28	P 16
		M 4		M 8		M 12

P = 初産婦 M = 経産婦

(内訳)

	A	B	計
I 母乳または人工乳	4	3	7
II 離乳食	5	7	12
III お風呂	1	2	3
IV 育児環境	2	2	4
V 発育	8	2	10
VI 健康状態	6	4	10
VII その他	2	2	4

3. 相談相手

	A	B	計	
I 実の両親	11	10	21	12
II 義理の両親	7	2	9	5
III きょうだい	3	7	10	6
IV 近所の人	8	4	12	5
V 保健婦助産婦	7	4	11	0
VI 病院	4	2	6	1
VII 電話育児相談	0	1	1	1
VIII その他	2	3	5	3
			不明	4

4. 罹患の有無

	A	B	計
a ある	12	17	29
b ない	6	3	9

5. 家庭訪問の有無

	A	B	計
a ない	9	15	24
b ある	9	5	14

連絡表

ケース番号 () 受持ち助産婦 ()

世帯主								
母氏名	()才							
児氏名	生年月日							
現住所					連絡先			
実家					職業	母	父	
診断								
家族構成								
既往妊分産褥経過	回	年月日	経過		性別	体重	健否	分娩場所
	1		S M					
	2		S M					
	3		S M					
	4		S M					
妊娠経過	異常の有無 (有・無) 中毒症 (軽症・重症) 糖尿病 心疾患 腎疾患 切迫流早産 IUGR その他 ()							
分娩経過	異常の有無 (有・無) 分娩様式 (正常 帝切 吸引 鉗子 骨盤位牽出術) 児所見 体重 () g SFD AFD LFD 身長 () cm・頭囲 () cm・胸囲 () cm 仮死 無・有 (1度・2度) 奇形 無・有 ()							
入院経過								
備考								